



6 2023

発行所 大阪市中央区玉造2-24-22 カトリック大阪大司教区 広報委員会 郵便番号 540-0004 TEL (06) 6941-9700(代表) TEL (06) 6946-3223(直通) FAX (06) 6946-3224(直通) E-mail: jho@osaka.catholic.jp 編集 広報委員会 発行人 前田万葉

本紙「点訳版」「音訳」があります。〈無料〉 ※ご希望の場合は下記まで申込み 「点訳版(点字本)」 時報 ☎06-6946-3223(直通) ☎06-6946-3224(直通) 「音訳(テープ・ディジー)」 山口さん ☎0798-34-4228

☆ 神戸ハイブルハウス20周年記念コンサート (3面) (2面) ☆ 千里ニュータウン教会50周年記念 (4面) ☆ 諸宗教対話委員会 廣田神社訪問 (5面) ☆ ラジオ「信仰の時間」大久保 武神父 生きる一難民移住者 ☆ イエスにならう生き方を求めて (4面) ☆ ガラシア健康だより第一回 ☆ カテキズムの学び ☆ 生きる一難民移住者 ☆ jho@osaka.catholic.jp

『時報』原稿・資料等の締切は前々月末です。

舞子共同納骨所の案内はこちら ▶ https://www.osaka.catholic.jp/cemeteries/maikoossuaries.html



# 新しいミサ式文 導入はスムーズ 課題も

時報 アンケート

新しい「ミサ式次第と第一〜第四奉献文」の変更箇所が実施されてから、約3カ月の時点で、大阪教区時報では各小教区に対して現状を問うアンケートを実施した。その結果、26小教区から回答があった。新しい式文になかなか慣れることができない小教区もあるが、おおむね導入はスムーズで、次第に慣れつつあることがわかった。導入に際して学習会をもつなど工夫が見られる一方、会衆の言い間違いや歌唱ミサへの取り組みに困難を抱える小教区が多く、式文に関する疑問も根強くあることもわかってきた。今後、新しい式文を生かしてミサをより豊かにするための課題も見えてきた。

▼質問① 信者さんは『新しいミサ式次第』によるミサに慣れてきていますか? について、回答のあった26小教区中24小教区で順調に慣れてきて、言い間違いも少ないとの回答があった。また、▼質問② 『新しいミサ式次第』に慣れるために小教区でされている工夫(複数回答可)について、ほとんどの小教区で『新しいミサ式次第』の小冊子を各信徒に配布しており、加えて勉強会や練習に取り組んできたことが分かった。

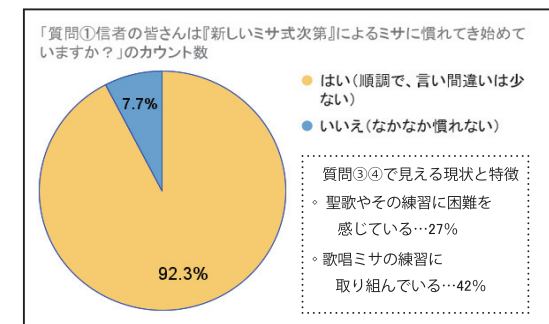
た。スライド(プロジェクト)を利用して小教区も四つあった。「長く慣れ親しんだ式次第が変わったため信徒が戸惑うのでは」と思っていたが、思っていたよりもスムーズに移行できているように感じている」との回答から、『新しいミサ式次第』の導入について、事前に準備をしていたこともあり、各小教区ともスムーズに移行できたことが分かる。しかし、方向を変えて▼質問③ 『新しいミサ式次第』を使うにあたって、今何が一番大変ですか? と問うと、問題なしと9小教区が答えたものの、オルガニスト、聖歌隊もしくは聖歌の練習に困難を感じている小教区が7つあった。司式者の対応(3小教区)を加えると、半数の小教区で唱えるミサについては慣れてきているが、歌唱ミサについては対応が遅れている現状が浮かび上がってきた。このことは、次の▼質問④ 今後、『新しいミサ式次第』をより理解してもらうために、小教区で実施した

いと思っっていることは何ですか? で、11小教区がミサ曲練習や歌唱ミサへの取り組みを挙げていることからも裏付けられる。司式者にとっても歌唱ミサは、新しいミサ典書だけで歌うのは難しく、楽譜や旧典礼書を援用しなければならぬので、導入にハードルは高いと言えるだろう。

「聖歌の練習に少し時間がかりましたが、今はもう大変ということはないと思われまます」との回答からくみ取れるように、オルガニスト・聖歌隊から練習が始まっており、今後、信徒全体で練習に取り組むことで、次第に新しい歌唱ミサも定着してゆくものと思われる。

もう一つの問題は、質問②で、信者の応答部分でどうしても言い間違えるところがあることだ(6小教区)。「新しくなった言葉のところで、古い言い回しが口をつくことはよくあるだろう。これも繰り返し修正したり練習したりすることで、次第に減少するものと思われが、信徒からの質問や意見に対して、勉強会やミサのお知らせを使って説明をつくすことも必要だと思われる。

また、「奉献文など、複数選べる箇所などは、大多数の信徒が複数あると認識していないので、その内容普及」も課題である。「新しいミサ式次第」では、季節やミサの主題に基づいて式文を選ぶことができる。その豊かさを味わうことができなくなってしまう。信



徒の高齢化もあつて順応するのにも困難を感じている小教区も多いのが現状だ。時間をかけて繰り返し、慣れゆくしかないとはほとんど小教区は感じている。「式文のさまざまなバリエーションを適切に選択し、ミサの豊かさを実感してい」ることが今後の大きな課題だろう。そのためには、ミサの司式者と奉仕者(先唱・オルガニスト・聖歌隊)との連携が重要であり、事前に関係者が集まって準備会をするなどの対応が求められるだろう。

「より丁寧な言い回しになっており、慣れてくると今まで使っていた言い方を忘れるほど」や「現代に近い表現が増え、気持ちなどを込めやすくなりました」など好印象もあつたが、新しい表現に対する違和感が多数表明された。このような違和感については、慣れるのを待つというよりは、神学的にも言葉の持つ意味を探求してゆく方が、ミサの持つ豊かさを実感することにつながるのではないだろうか。

「より丁寧な言い回しになっており、慣れてくると今まで使っていた言い方を忘れるほど」や「現代に近い表現が増え、気持ちなどを込めやすくなりました」など好印象もあつたが、新しい表現に対する違和感が多数表明された。このような違和感については、慣れるのを待つというよりは、神学的にも言葉の持つ意味を探求してゆく方が、ミサの持つ豊かさを実感することにつながるのではないだろうか。



## 聖香油

司祭叙階  
ダイヤモンド祝・金祝

前田大司教と司祭による香油の祝別  
4月5日(水)、大阪カトリック舞子共同納骨所で聖香油ミサがささげられた。昨年はコロナ禍により非公開ミサとなったが、今年は状況も落ち着き、79人の司祭と約200人の信徒が集まった。教区長である前田万葉大司教とともに司祭職の約束と更新、聖香油の祝別が行われた。酒井俊弘補佐司教は説教で「司祭とは神から油を注がれたものであり、キリスト自身です。だからこそ司祭職に呼ばれ、それに応え、司祭として生き続けることを約束する私たち聖職者は、この司祭職という宝を大切に守らなければなりません。そして私たち聖職者にはそうする義務があります。その生き方を特別な形で学ぶのが、明日からの聖なる三日間です。最

高、永遠の司祭として、私たちの前を行くイエス様が多られた道を思い出し、その同じ道を私たちが歩むことができるように、心を新たにいたしましょう。どうか私たち司教司祭が、神からいただいたこの道に、忠実であり続けるようにお祈りください」と述べた。ミサ後、司祭叙階60周年(ダイヤモンド祝)と50周年(金祝)の節目を迎えた7人の司祭の紹介があり、聖堂内は温かい拍手に包まれた。



新調された病者の器・洗礼 志願者の器・聖香油の器

## カトリック舞子共同納骨所 祝別式

4月21日、舞子共同納骨所の祝別式が酒井俊弘補佐司教の司式で行われた。舞子共同納骨所の改修工事が終了し、4月1日より新規受付を開始した。この改修工事により、共同埋蔵スペースが拡張し、多くの信徒が納骨できるようになった。納骨式は原則年1回(毎年11月第一日曜日)の神戸地区合同追悼祭時のみ。ただし、小教区担当司祭が特に認めた場合は、別日に納骨を行うことができる。

※ 祝別式の様子については、大阪教区ホームページ『墓地・納骨堂・納骨所』のバナー内にある、舞子共同納骨所の案内に掲載。

問い合わせ先▶ 資料請求: 教区本部事務局 (管理部門) 電話: 06-6941-9705

